一、前々より御定之通、組頭中罷出可致裁許候。組頭不致參向ば、其町之侍共罷出可有裁許候。但喧嘩仕出候双方共之一類縁者は罷出間敷事。

一、人をあやまり走込人之儀、如何様之子細候共抱置申間敷候。若隠置、以後出入致出來候へば、對御爲惡敷候。是又人々其趣可存事。

一、出入がましき儀は不及申、何様之儀にても組頭を差置、斷等申入間敷候。組頭可受差圖事。

右之通被得其意、組中可被申聞者也。

寛文五年三月十一日

喧嘩追懸者役杉浦仁右衛門奉伺覺書寫

金澤之内喧嘩之場に罷出申儀、御頭書被下候様仕度覺書之事。

一、喧嘩有之、町より案内次第組足輕召連罷出可申候。若案内無之候ば、存間敷候間罷出申間敷事。

一、組頭分之外は、不依誰々罷出候はゞ、隨分口上にて入分爲申聞、罷歸候様可仕候。若又不覺悟者御座候て申度儘申、理不盡可罷通と仕者之儀は、其場之様子により、不依誰々急度可申付候哉。但、其分通置、假名を記可申上哉之事。

一、私共未罷出内集候者之儀、使を立罷歸者は其分可仕候。不罷歸者は、假名を相尋候共申間敷候。ヶ様之者之儀は、如何可仕候哉之事。

一、往還にて相手を當座に切殺、私宅迄立退可申躰之者は、如何可仕候哉。相手果申上は往還に留置、組頭罷出候はゞ裁許いたし候様にと相渡可申候哉。其場を送り屆、組頭不罷出内、其町之人致裁許候様に相渡可申候哉之事。

一、又者、主人居屋敷并下屋敷にて喧嘩仕候はゞ、是も罷出申間敷之事。

一、名字も無之下々并町人等、往還にて喧嘩仕候はゞ罷出申間敷候事。

右之通御頭書被下候様仕度奉存候。以上。

四月廿二日　御印　　杉浦仁右衛門

本多安房殿

横山左衛門殿

長九郎左衛門殿

朱書。右杉浦仁右衛門より伺候紙面、外何之被仰出等無之、月日所に御印迄被成下候事。當役寛文五年三月初而、杉浦仁右衛門坂井与右衛門被仰付候。

喧嘩有之刻、先々より私共に案内有之筈に御座候處、一昨十八日喧嘩之節案内無之候。様子承合候處、陪臣に付案内不仕由御座候。向後は陪臣にても、私共方に其所々より案内有之候様に、頭并支配有之人々に被仰渡可被下候。以上。

（寛保六年）十二月廿日

渡邊半兵衛

永原權左衛門

二一　火之用心其他雜事之儀御定

一、春先風吹、火之用心之時分に候間、如去年面々手前火之用心之儀不及申、勝手次第火之番所又は屋敷之廻り夜番にても出し、無油斷氣遣仕候様可被仰觸候。

一、御組之内他國留守之方に、火事之節見廻之面々有之候ば、書付被出候様可被成候。

一、与力并又家中もの乘物御赦免之者、蒔懸乘物にて御座候。

一、不依上下、辻立・門立無用に候由可被仰觸候。勿論跡々より被仰出候御法度之品々、無相違様に年中兩度充御觸可被成候へども、爲念申上候。御横目茂出申候間、其御心得可被成候。恐惶謹言。

寛文二年正月十三日

中川八郎右衛門

津田源右衛門

玉井市正

二二　人形廻・躍子等之儀御定

最前被仰出候人形廻し・をどり子等、并他國之座頭・舞々、無故ものに宿かし候儀、不有來異形之諸勸進御停止之旨被仰出候。御國中町方・郡方にも申觸候。就其跡々侍方にも宿借置候仁有之由致沙汰候。左様之儀無之様組中急度可被申觸候。以上。

寛文四年七月廿三日